

〈巻頭言〉

2013年3月2日

第3回加藤組（加藤ゼミOB・OG会）総会「加藤先生，学長お疲れ様でした」の会  
講演

## 加藤幸雄先生と私ーバトンはしっかり引き継ぎます

二 木 立

加藤幸雄先生，学長としての4年間を含め，日本福祉大学での25年間のご勤務，本当にご苦  
勞様でした。私は本年（2013年）4月から先生を引き継いで，学長を務めることになりました。  
私の今の気持ちを一言で言い表せば「バトンはしっかり引き継ぎます」に尽きます。

ただ，それだけでは芸がないので，本講演では，まず，私から見た管理職としての加藤先生の  
経歴をできるだけ正確に紹介するとともに，先生の功績についての私の率直な評価を述べます。  
次に司法福祉研究者としての先生について，門外漢の立場から感じたことを述べます。最後に，  
先生からバトンを引き継ぐ私の決意を述べて，まとめに代えたいと思います。

### 1 管理職としての加藤先生

私は，日本福祉大学で25年間，加藤先生と，最初は同僚として，最近4年間は副学長，いわ  
ば「部下」として接しました。私と先生は，共に1947年生まれの「団塊の世代」（1947～1949  
年生まれ）のトップランナーで，そのためか気心が合うし，発想が似ているとずっと感じてきま  
した。これは，2人が「リアリスト」という面で共通しているためでもあると思います。

実は，日本福祉大学への赴任は私の方が3年早いのです。私は1985年，加藤先生は1988年  
です。ただし，管理職経験は先生の方がはるかに長く，この面では大先輩です。ここで先生の「管  
理職歴」を紹介しますと，赴任後4年目の1991年に早くも社会福祉学部長補佐（当時の学部長  
は故宮田和明先生）に就任されました。学部長補佐は現在は学部長指名ですが，当時は教授会に  
よる選挙で選出されました。学部長補佐を1期2年間務められた後，連続的に，学生部長を2期  
4年，学長補佐を1期2年，副学長を5期10年務められ，最後に2009年度に学長（任期4年）  
に就任されました。つまり，先生の管理職歴は，本学の在職期間25年のうちなんと22年（9割）  
にも及ぶのです！

これらのうち、特筆すべきことは、加藤先生が、学長就任に先立ち、学長補佐を2年、副学長を10年も務め、大沢、諏訪、宮田の三代の学長に仕えられたことだと思います。そのためもあり、先生は一部では「影の学長」とも言われていた？とも聞いています（ただし、真偽のほどは分かりません）。しかも1997年度に、学長補佐就任と同時に常任理事にも就任され、以来今年度まで16年間、大学・法人の経営にも参画され続けました。

私は、加藤先生の副学長時代の最大の功績は、2001年度の通信教育部（現・福祉経営学部（通信教育））開設を主導されたこと、および通信教育部長としてその基礎固めをされたことだと思います。実は、通信教育部は当初、社会福祉学部に設置される予定だったのですが、同学部の強い反対により、経済学部経営開発学科（当時）に設置されました。私自身は、通信教育部の開設そのものには賛成しましたが、通信教育部で社会福祉士を養成するのは「手抜き教育」だと考え、社会福祉士養成コースを設置することには強く反対しました。しかし、その後の経過を振り返ると、この判断は不適切だったと反省しています。なぜなら、通信教育部の経営面での大成功は社会福祉士養成コースを設置したからこそ実現し、その成功が日本福祉大学の現在の経営を支えているだけでなく、通信教育部の社会福祉士国家試験合格率は5割を超え、社会福祉学部を上回るに至っているからです。社会福祉学部の合格率も、かつては5割台をキープしていたのですが、この数年、急速に低下し、去年は4割を割り込んでしまいました。

さらに、加藤先生は、副学長として、教員の教育負担を5コマから6コマに増やす等、さまざまな「痛みを伴う」教員制度改革も主導されました。この点で、先生が偉いと思うのは、このような改革を上意下達で権力的に行うのではなく、学部教授会や大学評議会（教学の最高意志決定機関）での討論になんども委ねられ、そこで出された疑問に丁寧に対応されて、原案をなんども修正され、最後に合意形成を実現されたことです。ちなみに、この改革に関しては、私は社会福祉学部長（2003・2004年度）等として、先生や宮田学長を全面的に支えました。

加藤先生は、このような功績・業績を携えて、2009年4月、満を持して日本福祉大学学長に就任されました。その前年10月の学長選挙時の「推薦書」は私が執筆したので、参考資料として添付します。なお、先生は本選挙で有効票の70.5%を獲得して圧勝されました。

加藤先生の学長としての4年間の最大の功績は、言うまでもなく、2015年度の東海キャンパス開設（看護学部の新設と経済学部・国際福祉開発学部＜2014年度に国際学部に改組予定＞の移転）を、渡辺照男理事長（本年3月に退任予定）と共に主導して決定されたことです。ここで、今だから言える「秘話」をお話しします。実は看護学部は当初、半田キャンパスに開設予定だったのですが、先生は早い時期から東海市に開設することが適切ではないかと主張されており、結果的にその通りになりました。もし、看護学部が当初の予定通りに半田キャンパスに開設されていたとしたら、東海キャンパスの開設は不可能であり、その場合には、大幅な定員割れに悩んでいる経済学部と国際福祉開発学部はじり貧に陥っていた可能性が大きいと思います。

その他、加藤先生は、4年前の学長選挙時に掲げた公約の大半を実現したか、実現に向けた筋道を立てられました。後者の代表例が、「キャンパス内全面禁煙」です。これは、国際的にも、

国内的にも、当然の流れですが、本学では一部有力喫煙者の抵抗が強く、なかなか実現できませんでした。それに対して、先生は、全学協議会（学内諸組織が参加する本学独自の合議機関）でこれの必要性を粘り強く訴えて、学生自治会や大学評議会、教職員組合、職員会議等、大半の組織の合意を取り付け、本年1月から「キャンパス内全面禁煙」の方向に踏み出しました。現時点では、まだ経過処置として、教職員向けの喫煙所等が残されていますが、私は先生の思いをしっかりと引き継いで、学長就任後は、2013年度前期中にこれらを全廃する決意です。

管理職としての加藤先生の紹介の最後に、私が副学長として先生に直接お仕えした4年間に感じた先生の、私にはとても真似できない「特技」を3つあげます。第1は座談・即興的スピーチの名手であることです。私は「活字人間」で、どんな短いスピーチでもメモなしにはうまく話せないのですが、先生は、それなしにいつも当意即妙に、聞き手の関心・心を引きつける話をされます（ただし、興に乗りすぎて、時々持ち時間をオーバーされるのが「玉に疵」です）。第2の特技は、人付き合いの良さ、周到な根回しと「落とし所」の的確な判断です。第3は、生粋の名古屋人（県立旭丘高校→名古屋大学教育学部卒等）であることを生かした、多世代・多領域に渡る人脈の広さです。

## 2 司法福祉研究者としての加藤先生

次に、司法福祉研究者としての加藤先生について、門外漢の立場から感じたことを簡単に述べます。

私が一番立派だと思っているのは、加藤先生が管理職業務の傍ら、重大な刑事事件被告の高水準の「犯罪心理鑑定」を継続的に行なわれたことです。先生によると、この25年間に25件、つまり平均1年1件の鑑定をされ、大半が殺人等死亡事件の鑑定だそうです。

この点に関連して、私が一番印象に残っているのは、H市母子殺害事件被告の鑑定で、加藤先生（当時副学長）や弁護団が激しいバッシングを受けた時に、先生が毅然とした態度を貫かれたことです。実は、私は、新聞報道で先生の鑑定結果を読んだときは、「被告に甘すぎるのでは？」と疑問を感じたのですが、先生から直接お話しをお聞きして、それが的外れだったことを知りました。ちなみに、当時、テレビでバッシングを煽り立てたのが橋下徹弁護士（現大阪市長・日本維新の会共同代表）でした。

これ以外にも、重要な事件・裁判が起こるたびに、加藤先生は、新聞紙上で談話等を発表され、いつもそれに啓発されました。ごく最近では、愛知県西尾市ストーカー殺人事件で服役・出所した後、傷害事件を起こした元少年の地裁判決（3月1日）に先だって、「毎日新聞」2月28日朝刊に、被告の心理状態や更生に必要なことについての先生の談話が掲載されました。私は、毎日、新聞6紙を読んでおり、この裁判・被告についての他の専門家の談話も読んだのですが、先生のものが一番説得力があると感じました。

加藤先生は、山口幸男先生（本学名誉教授。「司法福祉」という概念の命名者）が主導して

2000年に創設された日本司法福祉学会会長に2009年に就任されました。先生は現在でも学会長として、同学会を牽引されています。ちなみに、日本福祉大学は司法福祉研究のメッカで、本学若手ホープの湯原悦子准教授も学会の最年少理事を努めています。先生が、学長退任後、司法福祉研究と学会活動、さらには犯罪心理鑑定に専念できるのは、同じ年齢でありながら、4月から学長に就任する私から見ると、羨ましい限りです。ただし、先述したように、日本福祉大学で22年間連続で、管理職業務を続けられた先生には、当然の「ご褒美」と思います。

司法福祉研究からは少し離れますが、加藤先生は、2011・2012年度の2年間、日本社会福祉学会理事（研究倫理委員会担当）として、会員の社会福祉学研究のレベルアップと研究倫理の遵守に尽力されました。先生は、昨年10月に関西学院大学で開かれた第60回大会秋季大会では、同委員会の特別企画研修として、「研究論文における研究倫理上の課題と指導方法を学ぶ」を企画され、私に「基調講義」（「研究論文はいかにあるべきか—研究倫理を踏まえた研究論文の書き方・指導方法」）の機会を与えていただきました。この場を借りて、改めてお礼申し上げます。なお、この基調講義は、4月1日に出版する拙著『福祉教育はいかにあるべきか？—演習方法と論文指導』（勁草書房）の第2章に収録します。

この項の最後に、加藤先生の単著『非行臨床と司法福祉—少年の心とどう向きあうか』（ミネルヴァ書房、2003）について、一言触れさせていただきます。先生からは今までに御著書を何冊か頂いたのですが、恥ずかしながらきちんと読ませていただいたのはこの本だけです。この本は分析の視角と評価の両面で、実にバランスがとれていたことを今でもよく覚えています。それに加えて、この本の「まえがき」で、「非行臨床は、みんなが求めているはずの『心のつながり』を広げていく営み」との先生の熱い思いが、ストレートに書かれていることに驚き、「冷徹なりアリスト」と思われ（誤解され）がちな先生の別の一面を知ることができました。

### 3 加藤先生からバトンを引き継ぐ

既に述べたように、私は、本年4月から加藤先生を引き継いで学長に就任します。そして、基本的には、先生が敷いた大学・教育改革の路線を踏襲します。最大の課題は、言うまでもなく、2015年度の東海キャンパス開設と美浜・半田の既存キャンパスの整備を柱とする「新中期計画」を成功させ、知多半島全体と名古屋市に根を張った「ふくしの総合大学」を建設することです。東海キャンパス開設は、1983年の美浜キャンパスへの全面移転以来30年ぶりの大事業で、これの成否が日本福祉大学の将来を決めると言っても過言ではありません。

地方の中小規模私立大学は、少子化および受験生・学生の首都圏・関西の巨大ブランド私学への「二極集中」のために、現在大変な困難に直面し、定員割れが常態化しています。残念ながら、本学もその例外ではなく、加藤先生が学長だった4年間のうち、入学定員を充足したのはわずか1年にすぎません。しかし、私は、長期的には、福祉・医療は「永遠の安定成長産業」であり、しかも働きがいのある職業・職場であると確信しています。学長就任後は、新理事長と共に、教

学・経営一体かつ、すべての教職員の英知を結集して、難局を乗り切りたいと決意しています。本学は本年創立 60 周年です。「加藤組」の皆さんには物心両面のご支援をお願いします！

#### 追記

私が副学長になる前に加藤先生と夜よくお会いしていたのは、知多奥田駅構内のクエスチョンです。私のゼミ（専門演習）のコンパはすべてクエスチョンで開いていたのですが、そこでゼミ生等と会食していた先生とよくお会いしました。その折に、先生には、私の持ち歌としている美輪明宏さんの「ヨイトマケの唄」を何度も（無理に？）聞いていただきました。私は、日雇い労働者（ヨイトマケ）の汗と涙、および親子の情愛を高らかに歌い上げたこの歌は、社会福祉の「どんなきれいな」政策よりも、「どんなきれいな」理論よりも、日雇い労働者を「励まし慰め」、彼らに対する偏見や差別の解消に貢献したと考えています。そのために、学長就任後はこの唄を（美輪さんのご許可をいただいた上で）「日本福祉大学第二校歌」にしたいと密かに考えています。

【参考】

推 薦 書

2008年10月2日

社会福祉学部教授 二 木 立  
子ども発達学部教授 近 藤 直 子  
健康科学部教授 城 川 哲 也

次期学長の候補者として、加藤幸雄現副学長を推薦いたします

今日、日本の大学、特に私立大学は大きな転換期を迎えており、本学もその例外ではありません。

加藤副学長は、この10年間、諏訪兼位前学長と宮田和明現学長の下で筆頭副学長の重責を担われてきました。その間、大学全体の教育制度改革や学部学科新設・改組など、さまざまな改革の実務面での責任者として、強いリーダーシップを発揮されてきました。また、文部科学省の各種GPプログラム申請の陣頭指揮をとられ、その結果、本学は全国の私立大学中トップクラスの採択数となっています。リアリストである加藤副学長は、時には「痛みを伴う」教育・教員制度改革の提案もされましたが、学部教授会・大学評議員会や学内他組織から出された疑問や批判に、いねいに答えられ、必要な修正を施されました。加藤副学長のこの間の業績で忘れてならないものとして、教学代表の理事として学園理事会で粘り強く活動され、本学教職員の長年の願いであった、学園名称の変更（学校法人法音寺学園から学校法人日本福祉大学へ）を実現されたことがあげられます。

他面、長年進行し続けている18歳人口の減少と最近数年間に急速に生じた受験生の「福祉離れ」のため、本学の受験生は全体としては減少傾向が続いています。この面での本学の地盤沈下を克服するためには、今後、時代の要請に応えた教育改革、新学部の開設・改組や大学院改革等により本学の教育機能を大幅に向上させるとともに、教職員一体で大学の運営基盤を充実強化することが不可欠です。強いリーダーシップと率直な人柄を持たれる加藤副学長は、このような改革を進めるための最適任者と考えます。

この困難な時代に、敢えて立候補された御決意に、尊敬と歓迎の心を込めて、加藤幸雄副学長を次期学長として推薦申し上げ、全学の教職員、学生・院生の皆様の御支持・御支援をお願いするものです。